

## 佐呂間郵便局は 二度設置された

佐呂間郵便局は、二度設置された。他の郵便局と比較して、一寸変わった歴史がある。

先づ最初は、常呂郡鑑沸村中佐呂間郵便局ということ、現在の佐呂間市街永代町に設置され、事務業務開始されたのは、明治四二年三月三日であった。

その郵便局が、何故か大正二年二月一日に、現在の武士三九号に移転してしまつた。その時の局長は、佐々木喬という人で、昭和四年二月まで、武士の地域にあつても佐呂間郵便局の名称で業務を行なつていた。その間に局舎が現在の、若佐市街九線四〇号に移つたが、そこから中佐呂間市街、知来、富武士等にも郵便物を配達していたが、

配達のこととはさておいて、局が遠い地域の住民が、郵便局まで行って用達するには、大変に不便だったので、中佐呂間地域から、富武士、知来等の人達がこぞつて、札幌通信局に対して、中佐呂間に郵便局の設置を請願した。それで大正八年になつてやつと。無集配局としての設置の許可が出て、大正八年四月一日からの業務開始されたのが、現在の佐呂間郵便局の始まりとなつてゐるが、何んとなく歴史的に、佐呂間郵便局が古いはずなのに。新しいような印象を受けるような、面白い過去がある。

無集配局が、集配局となつたのは、人口も増して来た大正一五年からで。その年昭和と年号が変わつてゐるから、普通郵便局の姿になつたのは、昭和のはじまりからだから、佐呂間町の開基百年の年平成六年で、約七〇年となる。

中佐呂間郵便局が、佐呂間郵便局と名称が変わつたのは、字名が各地に変更しだして、佐呂間町内も、昭和三〇年に字名が変更されたとき、中佐呂間が、佐呂間となつたので、郵便局も地名に合わせて「佐呂間郵便局」と変更した。

元佐呂間郵便局長の杉本磐氏が色々メモを下さつたので、そのメモの中に「電話事務開始」が、昭和四年二月一日と書かれていて、電話交換事務が、昭和六年四月二〇日となつてゐる。昭和五〇年代には、町内全戸殆んど電話加入者になつたが、半世紀前とは雲泥の差の世の中の変りようですね。

佐呂間郵便局の歴史に。昭和二年四月の佐呂間市街の大火に合い、市街中心から南側東に向つて焼けたとき全焼し。現在地に所在地が変更になつてゐる。

語り手 杉本 磐  
文責 徳永 良行

## 川口郵便局と中佐呂間郵便局が 同時に若佐郵便局となつた

佐呂間の郵便局も複雑さの歴史をもつてゐるが、浜佐呂間郵便局も二度設置されてゐることも判つた。

元若佐郵便局長の、今定年退職されている春木忠一氏が、若佐郵便局の記録に、可成り古くからの記録があるといわれたことがありましたので、一度お伺いしたら快く郵便局の記録について話しして下さいました。

若佐郵便局は、明治四四年四月に、若佐郵便局の前身、川口郵便局が現在の浜佐呂間に開設されて、「川口郵便局」の名称で業務をしていたその流れである。

又別の一方、中佐呂間郵便局は、明治四二年三月三日に。現在の佐呂間市街永代町に設置され、業務開始をしてゐる。

それが、それぞれの地域の人口の増加の変化に伴つてからのことであろう。川口郵便局は、武士一〇線三九号に施設一切を移転させ、川口地域の郵便の集配を、常呂郵便局に委せることになつた。それは大正二年一月一日と同時に、中佐呂間郵便局も武士一〇線三九号に合併させるということになる。そうして、武士一〇線三九号の地に。佐呂間郵便局の名に於て、後のと言つても現在の「若佐郵便局」のはじまりであつた。

大正二年に、当時の川口郵便局と、中佐呂

間郵便局が業務中に無くなって、現在の若佐の一〇線三九号に、「佐呂間郵便局」の名称でもって開設された理由は、行政に素人の吾れ吾れが想像するには、

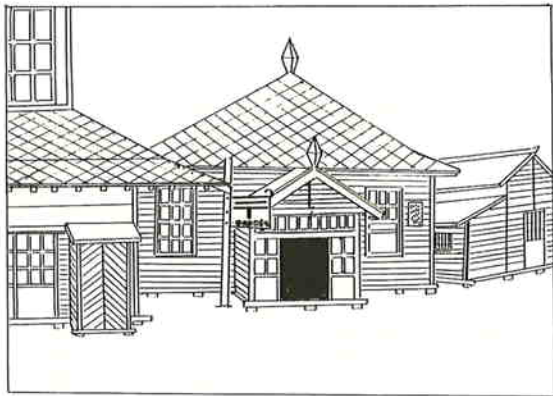
現在の佐呂間町の地図を見ると。号線道路が、碁盤の目のように、縦横に走っている面積の広さは若佐の地域が、他の地域と比較したら随分広い。大正二年は、明治が終ったばかりで、佐呂間は未だ商工業は出来ていてもほんの小規模で、それに携わる人口にもいくらもないことがあつて。産業の主力は、開拓農家であつて、農家人口の自然に多くなつた当時の武士に郵便局が移設されたと考えられる。そうして、佐呂間の中に只一つの郵便局となつたため、『佐呂間郵便局』の名称が付けられたのでせう。

この記事を少し横路に入つて見ると。武士三九号は、交通の便として栃木団体がどつと固まつて二年前に入植している。それが六六戸、それが明治四四年、大正二年四月に再度栃木県から二二戸第二次移民として来ている。その栃木団体の部落に通じる道が、現在の四〇号では当時湿地であつて交通が困難で、三九号が通り易かつたと古老は言つていた。余談をも一つ、栃木道路が武士の原野を斜めに若佐小学校の方に、昭和の始めごろまであつた程で、

余談に余談が重なるが、内地からの移住開拓者が、佐呂間の中に入って来た団体で、一度に六〇戸。二〇戸等数一〇戸と固まつた

団体は、佐呂間にない。佐呂間市街近辺に明治三八年に岡山団体が三〇数個一度に入ったという記録は、北海道庁に入植予定の申請者の名簿で実際にその最初に来たのは、一〇数戸で、佐呂間内での、各地域の先人の開拓入植は、個々思い思いに入植しているようだ。若佐に、大正二年に佐呂間郵便局が置かれた理由の中に、榮、当時の上佐呂間も控えていた。當農の出来る栄地区の耕地は。現在の佐呂間小学校通学区位がある。正確に調べもしないで言うのはどうかだが、佐小区域より広いようだ。

語り手 春木 忠一  
文責 徳永 良行



元佐呂間郵便局と言われた若佐郵便局舎

## 佐呂間市街付近にあった貝塚

本当に突然の出逢によつて、知り得たのです。貝塚の本題の話に入る前、何故サロマ別川付近に、貝塚があつたかということ、私を知つたかのことから書いて見ます。

昭和五三年頃、もう可成り前のこと、留辺薬町字瑞穂の方で、谷口重雄と言う方が、留辺薬町郷土史研究会長で熱心に研究調査されている最中に、ある古老の方が、カラス貝の貝塚があることを知らされ行つて見たことがあるが。現在は、大水で流されてしまつて全く影も形も無いがと聞かされ、

それで私(谷口氏)は考えるのだが、サロマ別川も、瑞穂の上流まで来たら可成り小さいくなる。あれだけの量のカラス貝の貝殻が固まつてある限りでは。時代は判らないが、先住民が住んでいて。生活していた名残りのものだという事は判るが、先住民を追求し研究するのは、専門の大学当りの先生でないと判らないが、どうだろう、徳永さん、あなたは佐呂間市街付近に今いるのだが、若佐当りから下の方に、貝塚があつたかという古老の話聞いた私は、私も少し物好きで、変つた話など追求してみたくなるのだ。それとなく、時たま、この方ならひよつとしたら知つていかなと思いつつ、幾度か聞く人が変わるうちに。郷土の昔のこと熱心に調べる小島善之丞さんに話をして見ようと考え、小

島さん宅に行きましたら、小田病院に入院中とのことで、小田病院へ訪ねて行きました。このときが偶然の偶然に、貝塚が現在の佐呂間市街の近くにあった事が知ることが出来たのでした。

小島さんの入院している病室に、同室していた長尾重雄さんが貝塚のこと知っていたのでした。長尾重雄さんの話は、

「私が親父に連れられて、明治三十九年に、今の佐呂間市街の西側を通っている。二九号線が、サロマ別川のところらぶつかると、私の親父が入植し、開拓したのだが、その我が家の敷地内に。カラス貝の殻が山の様に高く盛りさっていたよ。

荒地を拓くに忙がしい年月に。貝塚の山等は邪魔は邪魔でも、拓き耕す土地はいくらでもあるから、貝殻の山は何時までもそのままにしてあった。大正二年の大凶作の年、東区に二度目の開拓に引き起こしたが、その年頃もそのままあった。

## 佐呂間別川流送の話

### 先づ流送の段取木材集積から

明治三四年、サロマベツ原野の区画割が設定されて、植民地として公示された。そして、明治三六年春、仁倉、知来、幌岩に農業開拓の先駆者が入地、以来次々と年を追って各地

今徳永さんが、カラス貝の貝塚と言うのが私の小さい時、うちの敷地内にその貝塚があったのだから、留辺蘂町の瑞穂にもあったと言うのなら、サロマ別川付近に可成りの数の貝塚があったのだせうね。」

この話の途中。私も小島さんも様々なことをしゃべったが、カラス貝は、大正生れの私も川から拾って来て、一度煮たのを食べたことがあったが、美味しいものでなく二度と食べる気もしなかったが、何千年か何万年かの昔、サロマ別川近辺に。全くの和人と違う先住民族が、生活していたという証拠となるが仁倉、浜佐呂間付近の遺跡調査も佐呂間町も最近熱心に行なっている。専門の考古学的なことは、私共の知識ではおぼつかないの、サロマ別川の近辺の貝塚は、荒地の開拓に挑んだ先人は、邪魔なものと考えたことでせう。現在何処にも跡方もないのは、大川辺にあったため。原始林が伐り拂われ。大きな木の張り根に守られていた大川岸辺は、大

に、多数の人達が先を争う様に入地、開拓に励んだ。

而し、文字通り千古の原始林だ。素晴らしい大木が林立し、中には、三人で手を繋いでも抱えられなかつた程の大きな木もあった。先づこの木の始末が仕事だ。山の様に積んで焼くしか方法がなかった。

やがて、本州資本家や、木材商人が目をつけて商談が始まる。而し輸送は専ら船で、

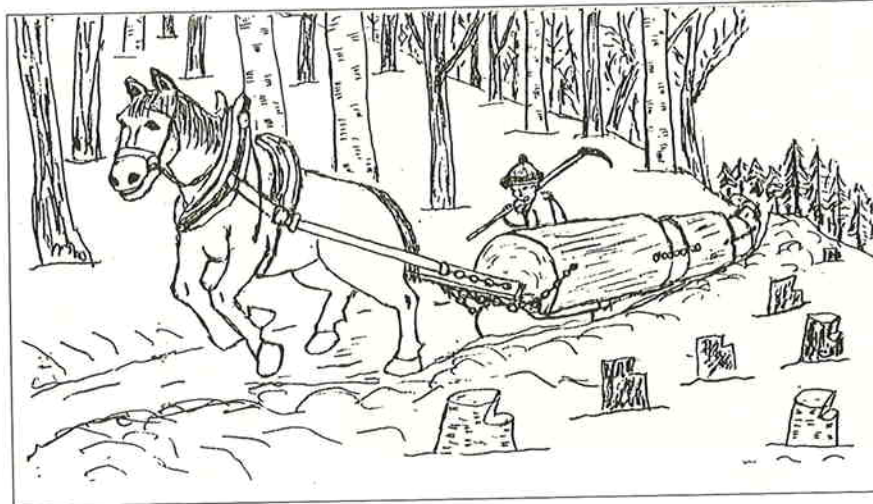
雨の大水害の度、右に食い込み、左に食い込みしている間に。先住民の生活のあった証しも消えてしまったのでせう。

語り手 長尾 重雄  
文責 徳永 良行



宗谷か知床の岬を回って、本州方面へ送られるのだ。佐呂間開拓の各地域でも、海岸近くの木材は馬搬も可能だったが、殆んど地域で川水の流れを利用した「流送」が行なわれたのである。

冬になれば、条件のよい処を流送用の土場に選び、馬でそこを集材をする。而し、その馬搬も当時の道具では仲々大変で、当初のころの馬轡は「巾一尺八寸(五四センチ)荷台



伐木された用材のタマ引き馬の時代は、このように玉切った用材を幾本も連結して、先頭の丸太をタマの上に頭の方を乗せて、馬に引かせた。

の長さ六尺(一、八メートル)に一二尺(三、六メートル)の材を積んで運ぶのだから大変だ、大木が多く、角材が殆んどであるから、馬櫓に積み降しも大変に体力が要る仕事だ。櫓巾が狭いので、一寸した道の凹凸の処でもひっくり返る。仲々の技術の要する仕事だった。

又、余り材が太いのは、馬櫓に乗せられないので、先の方を「タマ」と言う特殊な小さい櫓に、材の端の方だけを乗せて、材の後方に短い櫓をはかせて、一本づつ挽く方法をして馬で運んだ。

### いよいよ流送

サロマ別川も、仁倉や知来地域では、水量も多く、集材の都合の良い場所でき落して木材を流したが、上流の地域の水量の少ない場所では、堰を造って水を溜めそこえどんどん流送用の木材を、運び落し込む。

水と木材が予定通り溜ったら、仕掛けのワイヤロープを、一息に引いて堰を崩して流すのだ。テッポウ水の様な状況になるので、この仕掛けのことを、「テッポウ」と言っていた。

流送のための堰を切ったときの壮観さは物凄く、滝の様な水の勢いの中を、木材がぶつかり合い、水飛末を上げてごうごうと、地響きを立てて、崩れ流されて行く様は、正に一大スペクタクルであり、勇壮な男らしい男の仕事でもあった。

この様なテッポウが、一冬に数ヶ所に設けられ、春の雪解け水で流すのだが、楢やタモ樺等の、重量材は、流れ行くうちに沈むものもあるため、あらかじめ軽い材二本で挟んで筏に組んで流すのだ、だが中には、完全な筏仕掛けが出来なかったため、下流に行く途中沈んでしまうことがある。それは、近年の河川改修の工事のとき、時たま、見事な沈木が掘り出されて重宝がられている。

川の流れも、昔は原始河川で、曲りくねった処が多く、順調に流れぬため、身軽な若者が長い柄の「ハヤスケ」を巧みに使って、丸太や角材の上を、飛び回りながら流して行くのだが、危険な仕事であり、度胸と体力それに技が求められ、誰にでもやれる仕事ではなかったから、印袴天に、脚半、地下足袋でキリットした身揃えの流送人夫は、当時の若者の花形だった。

ほとんど流される木材は、そのままではサロマ湖に散らばるので、下流地域に太いワイヤロープに数本の丸太をカンで繋いだ「網<sup>あば</sup>」を張り、そこで一旦止めて、業者別に木口の刻印で分別して筏に組み、サロマ湖を曳いて目的の集積場に運ぶ。

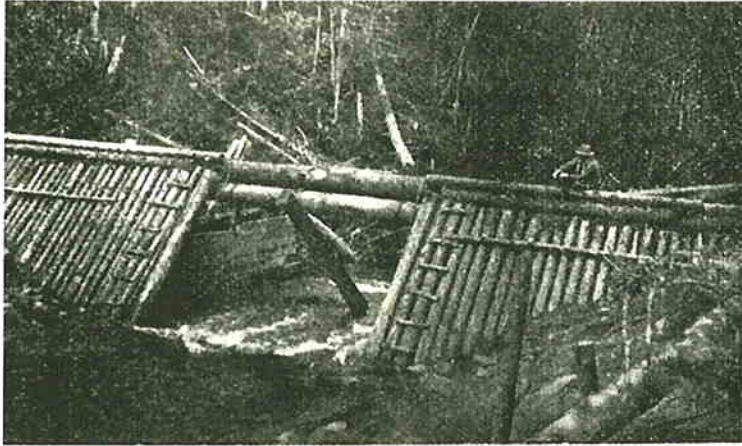
当時は、湖口がカキ島(栄浦)であったから、そこから外海に曳き出し、本船に積み取られて行くのだ。



## ・流送にまつわる様々なドラマ

### ◎仁倉にあった話

仁倉と浜佐呂間の境の、防風林の太い立木を利用して、第一の網場が張られ、万一を考えて、第二の網場を二号線付近（片岡さんの宅の処）に設置された。



流送用テッポウ

何千石かの木材が、次から次と流れて来て川の中が盛り上がるようになって、延々と一、五〇〇間（二、七キロメートル）もの上流までびっしりと、木材で埋ったこともあった。

### ◎網場で川水も流れが止まりトラブル

大正初期のある年の春、網場に予定の木材が溜っているのに、何故か業者は、その網場から仲々流送をしない。雪解けの水も増して付近の農家の畑が、水浸しになっても業者は網場の堰を切らぬので、農家も春の蒔付けが出来ない。木材業者に川を明ける様申し入れたが、百姓を見くびって応ぜず、溜まり兼ねた農家の若者数人が、危険を冒してワイヤを切って網場破りを強行した。その瞬間、一度に大量の木材が不気味にひしめき合いながら地鳴りをして流れ出した。さすがの荒らくれ業者の連中も慌てふためき、顔色を変えて第二の網場へと走ったと言う。

（津田市蔵さんの話）

### ◎仁倉川と佐呂間別川の合流地昔の様子

仁倉では、仁倉川の合流する処に、公共用地の広い空き地があって、毎年冬には、大きな木材の土場が出来て高々と山の様に積まれ、春から夏にかけて、六・七人の人夫が木やり歌を、面白い文句に節付けて、調子を合はせ、流送のための木材のつき落しを行っていた。

こう言う風景は、あの当時は、佐呂間の中

で各地にもあったのではと考えられます。

### 知来での流送

知来では、興生沢の出口の処で、つき落し土場があった（渡部福宣さんの話）、その外に、尚和から流れ来る川と、サロマ別川との合流する処と、下知来の一五号付近でも、つき落しの流送土場が設けられていた（芹沢元雄さんの話）。

### サロマ別川上流のテッポウ

サロマ別川の、上流地域となると、テッポウの設備をしないと、大量の木材の流送が出来ない。今の永代橋の上流二〇〇m程の処の山の下にテッポウの堰があったとのこと。

（杉本磐さんの話）

それから、（小島善之丞さんは）元桜橋があった処が、テッポウに最良の地形で、あの狭い岩石の場所が、テッポウによく使われていたと言われた。

明治三九年に、若佐に入地した大野団体（岐阜団体とも言う）が川西付近に、マッチの軸材に最もよい白楊の木が、畑に拓く処に沢山あったので、川口の製軸工場に流送で送って、現金収入に助かった話がある。

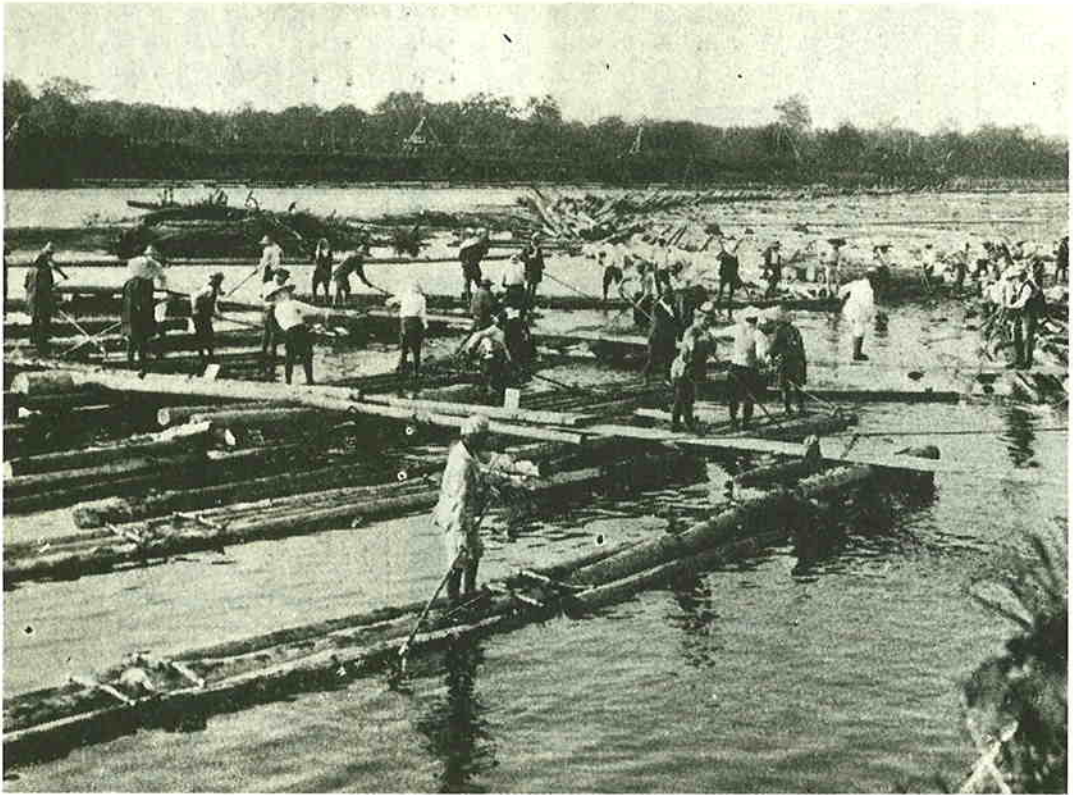
（大野団体最初の人杉山甚助より聞いた話を山下寿一さんより）テッポウの場所不明。

更に上流地域の。留辺蘂町瑞穂の地域でも、数ヶ所にテッポウ施設をして、木材を、サロマ湖へ流送した話がある(谷口重雄さんの話)

明治から大正と昭和、十幾年に亘り何万石、いや、もっと多いかも知れぬ木材が、サロマ別川を流送されて行ったのだ。而し北海道も次第に鉄道が敷かれ、大正元年には留辺蘂まで汽車が来て、大正五年に、生田原に汽車が来て、木材の輸送も汽車の時代となり。河川利用の流送も、大正末期には姿を消した。

だが、仁倉、浜佐呂間、幌岩では、鉄道にも遠く、昭和一〇年頃まで湖や川を利用されていた。

文責 室井 四郎



アバ 流送の終点、川口の風景、ここで移、輸出用は船に積まれ工場行き等とに分けられる。